opusdei.org

人々は私たちの兄弟 (I)

友情と愛情は兄弟的説諭が豊かな実りをもたらすためのベースです。神は一人ひとりから最も素晴らしい善を引き出すため、私達の人間関係の中で働かれます。

2022/02/26

カファルナムに戻ったイエスが町に 入るやいなや、百人隊長が近づきま す。人々は驚きます。ローマ兵が敬 意を込めて丁寧にユダヤ人に話しか

けたからです。「主よ、わたしの僕 が中風で家に寝込んで、ひどく苦し んでいます」(マタイ8,6)。この兵 十は、部下たちを支配するのに慣れ ているとしても、社会生活の中で、 自分の権限の及ばない分野が多い事 を弁えていました。彼の任務は、あ る秩序を築くことであるとしても、 手の届かない多くの重要なことがあ ると認識していました。それで、助 けを求めることを厭わなかったので す。彼の心構えをご存じのイエス は、彼が願う前に仰せになります。 「わたしが行って、癒してあげよ う」(マタイ8,7)。聖アウグスティ ヌスはこの場面をコメントして言っ ています。「百人隊長は謙遜によっ て、主がお入りなる心の扉を開き、 主の完全な支配を受けることができ たのです」[1]。

戦いへと動員されている家族

すでに手にしている権力や勲章にも かかわらず、愛する部下を助ける力 のないことを認めたローマ兵に、主 は心を動かされました。百人隊長 は、全てを手に入れることはできな いことを公言します。助けの必要性 を自覚しているこの態度は、ある意 味で聖性のあらゆる道に通じます。 私たちは自己の弱さを認め、神が主 人公であられることを知っていま す。主はご自分のみ業を成し遂げる ために、私たちの人生に関わる人た ちの協力をお使いになります。あの 僕のように、私たちも傷ついたり、 悲しみに襲われるとき、他者の世話 を受け、癒されることを望みます。 「このような兄弟愛にもとづく連帯 は、単なることばの綾ではなく、キ リスト信者の交わりの不可欠な部分 です。もしこの連帯を生きるなら、 わたしたちは世において神の愛のし るし、『秘跡』となります。 (…) この交わりは、わたしたちが他の 人々の喜びと痛みにあずかり、それ

を真剣に自分のものとすることを可能とするからです」^[2]。

例えば、私たちはミサの中でこの現 実を自覚しています。それゆえ、全 教会に向かって私たちのため祈って くれるように頼みます。「全能の神 と兄弟の皆さんに告白します。私は (…) 罪を犯しました。 (…) 兄弟 の皆さん、罪深いわたしのために神 に祈ってください | ^[3]。 例外的なこ とを願っているのではありません。 私たち全員が他者に頼る者として生 まれてきたのです。自分の決意でこ の世にやって来たのでも、たった一 人で生きるのでもありません。誰一 人として、迎え入れてくれる共同体 がなければ、話すことすらできない でしょう。他者を必要とすることは 私たちの本性に属していることで す。それで十字架の聖ヨハネは言う のです。孤立している人は「たった 一つの炭火のようです。その内、燃 え尽きてしまうでしょう…。盲目に

なったら一人では立ち上がれないでしょう。立ち上がったとしても、相応しいところに行きつけないでしょう $|^{[4]}$ 。

隣人の協力を受けるとき、私たちは 助けを乞う百人隊長、あるいは癒さ れた僕と同じ状況に自分を置くこと になります。これは、例えば兄弟的 説諭の際にも起こることです。福音 に由来するこの習慣は、ある人が神 の御前でよく考え、さらに、他の誰 かに助言を求めた上で、私たちの生 活の具体的なある点を改善するため に勧めを与えてくれるのです(マタ イ18.16-17参照)。この助けによっ て、私たちは家族ぐるみで闘いに参 加しているのだという安心感を得る ことができます。それゆえ、兄弟的 説諭は、批判、陰口、中傷の反対語 なのです。批判や陰口には裁きや非 難がある一方で、兄弟的な助け合い には、相手をありのままに受け入れ

る包容力、将来にわたって個性を尊 重する理解があるのです。

一人ひとりの最良の状態

絶え間ない回心はキリスト者として の生活に欠かせないものですが、そ れは、自己の人となりを別なものに 変えることを目的としているのでは なく、神の恩恵によって、最良の自 分となることにあるのです。聖人た ちは個性なき人になるよう招かれた のではありません。そうではなく、 唯一で個人的な自己の性格をキリス トの愛で一杯にするように呼ばれた のでした。例えば、聖パウロは回心 後、神に対する熱意を軽減するよう 呼ばれたのではなく、その熱意を究 極の真理に向けるよう招かれたので す、

私たち一人ひとりは、神に望まれた 固有な性格を有しています。そし て、それぞれは、自分の過去を持 ち、社会の具体的な環境の中で生き

神の助けを神のみことばの朗読や秘跡を通してのみ得られると考えるしてのは、神の働きとご計画を制限、20まうことではいるでしたないでは、な2つの領域にあることがよれながあることがはいまりも、そのはいがはないです。人となられたイエス10,16参照)。人となられたイエス

は、友情を通して身近な人たちの生 活を変え、他者との個人的な関わり に、救いの価値のあることを思い起 こさせてくださいました。「神は救 いの御業を成し遂げるために、何度 も正真正銘の友情をお使いになりま した | ^[5]。 救いの歴史の中で神がお 働きになるのは、一つの民族や共同 体、家族や友だちのグループにおい てです。聖性は、他者が私たちのた めになしうることを拒絶することだ と考えるなら、孤立の前兆であり、 実りのないものになってしまいま す。それゆえ、友愛的な環境で兄弟 的説諭が生まれるのは自然なことで す。それは個々人の最も良いものを 引き出す熱意を持っているからで す。それは、重要でない細々とした ことにこだわることではなく、日々 の生活の様々な様相において少しず つ深まっていく聖性への熱い望みか ら出て来る心遣いなのです。

教皇様が思い起こさせてくださいました。「聖化とは、他の人と隣り合って歩む共同の道です。(…)。相手の聖化のために、夫と妻それがキリストの道具となる、聖である夫婦もたくさんいます。だれかとともに生き、だれかとともに働くことは、まぎれもなく霊的成長の道です。十字架の聖ヨハネは弟子に、

『練り鍛え』られるために他者と暮らすのだと言いました。 (…)。ささやかな愛情表現を大切にする共同体では、成員が互いに気遣い合い、開かれた場、福音化の場を築いており、そこは、御父の計画のとおりにご自分をささげられた復活の主の現存の場です | [6]。

どのような助けも贈り物

福音書の百人隊長は、イエスに助け を求めていることを自覚していま す。主が異邦人の家にお入りになっ たら、後で清めが必要なことも知っ

ています。それゆえ、来ていただく ことも奇跡も無理にお願いしませ ん。この態度によってイエスの奇跡 が実現されたのです。百人隊長はキ リストに思いやりを示したのです。 誰かを「思いやりのある人」と感じ るときには、愛情や義務からではな く、私たちもその人に心遣いを示し たくなるものです。私たちが思いや りのある人になっていくならば、お 万いにごく自然に助け合う関係を築 いていくことでしょう。「思いやり は、キリスト者が選んだり拒んだり することのできる態度ではありませ ん。(…)。思いやりのある愛は、 きずなを生み、つながりをはぐく み、新たな融和の網を作り出し、確 固とした社会の横糸を構築します。 このようにして、それ自身を守るの です。帰属意識がなければ、他者へ の献身には耐えられません」[7]

この態度を培う方法を幾つか取り上 げてみましょう。助けを求めること をためらわない、いつでも耳を傾ける、押し付けることなく好みを知らせる、心配事や夢を共有する…。

「私たち皆が自ら携えるよう招かれ ているこの友愛の雰囲気は、他の 人々の生活を心地よいものにしよう と傾ける様々な努力の実りです。 人々が受け入れられていると感じ幸 せになるために、温かさ、喜び、忍 耐、楽観、濃やかさを獲得し、共同 生活を気持ちよくするすべての徳を 身に着けることが大切です」[8]。こ れら全ての事が、人の生活態度に表 れます。言葉で言い表すのは難しい ことですが、すぐに気づきます。思 いやりを示そうと努める人には、気 軽に近づき、話しかけ、気遣いを示 し、思っていることを誠実に話せる ものです。

率直に話しやす人に対しては、その 人の欠点が明白であったり、二人に 共通のことがあまり無かったとして も、簡単に好意を抱くようになるで

しょう。私たちは皆、自分にとって 勧めを言い易い人たちがいることを 経験から知っています。その人たち は、どんな勧めにもいつも感謝し、 穏やかな表情で受け取ります。そし て、私たちは自分の小さな助けがそ の人たちの生活に役立っていると感 じます。その人たちは、助言をくれ る人が自分を責めようとしていない ことを理解しているので、身構えた ところがありません。兄弟的説諭が 実践されるのはキリスト者の共同 体、家庭、家族においてであり、そ こでは、善悪を行うことで評価され るのではなく、あるがままに愛され るのですから、説諭によって自己の 評価が問題にされているのではない ことが分かります。助けてもらうこ とが難しくなるのは、多分ありのま まの自分ではない別の姿で愛しても らいたいという隠れた望みのせいか もしれません。それゆえ大切なこと は、この助けが必要になる分野をい つも広げておくことです。聖性への

熱意を共有しているなら、待望、心配事、喜びなど、他の多くの事柄も 共有することでしょう。

思いやりのある、また他者が助け易 い態度を身につけるよう努める人 は、自分に示されるその愛情に対し て大いに感動し、自己に示される助 けや兄弟的説諭という慈しみの業に 感謝するものです。幼い子どもたち が驚くのは、愛の仕草を当たり前と 思わないからです。ある時、聖ホセ マリアは数人の息子たちに話したこ とがあります。「私は近頃、今まで 以上に小さくなれるよう、小さくし てくださるよう、主と聖母に願って います。外見は逞しく堅固な人に なっても、内的生活においては幼児 でありたいのです。そうすれば、兄 弟的説諭を受けるときに、高慢を避 けることができるでしょう。私たち がもっと良くなるために助けてくれ ることを感謝するでしょう。他の方 法だと私たちを不愉快にするでしょ

う」^[9]。幼児になっていくならば、 私たちを他者から引き離す壁が取り 払われ、穏やかな環境が築かれ、説 諭を贈り物、無償の助けとして受助け 入れやすくなるでしょう。神の助け によって、イエスが百人隊長に表明 し、僕の治癒の奇跡を実現した言葉 を耳にするでしょう。「あなたが信 じたとおりになるように」(マタイ 8,13)。

* * *

 書の言葉が現実のものになるので す。「自分の兄弟から助けてもらう 兄弟は、堅固な高い町のようであ る。彼は堅固な宮殿のように強いし (箴言18.19。ギリシア語訳によ る)。愛徳は、私たちが他者に対し て行うことだけを指すのではありま せん。というのも、友の援助を受け 入れる態度の裏には、大きな愛があ るのですから。私たちは、私たちを あるがままに受け入れ、最良の者と なるよう助けてくれる人々に囲まれ て生きています。この現実を感謝を もって受け入れるなら、私たちは回 心へと促されるでしょう。そして、 それこそが聖性の土台なのです。イ エスの聖テレジアが言っています。 「私の考えでは、自分が神から愛さ れていることを悟らない時は、私ど もの本性の弱さから見て、偉大なこ とへと心が傾くのは不可能だと思い ます」[11]。神の愛の恵みは、周りの 人たちとの関わりを通しても与えら れます。

Diego Zalbidea y Andrés Cárdenas M.

- [1] 聖アウグスティヌス、説教6,2.
- ^[2] フランシスコ教皇、2013年11月6 日、一般謁見。
- [3] ローマ・ミサ典書、回心の祈り。
- ^[4] 十字架の聖ヨハネ『忠告と判定』 7:11.
- [5] フェルナンド・オカリス、司牧書 簡、2019年11月1日、5番。
- ^[6] フランシスコ教皇、『喜びに喜 ベ』141~145番。
- $^{\tiny{[7]}}$ フランシスコ教皇、『愛のよろこび』 $99{\sim}100$ 番。
- ^[8] フェルナンド・オカリス、司牧書 簡、2019年11月1日、9番。

- ^[9] 聖ホセマリア、1970年10月2日、 団欒のメモ。
- [10] 聖ホセマリア、手紙25, n.30。
- ^[11] イエスの聖テレジア、『イエズス の聖テレジアー自叙伝』10,6。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ Hitobito-ha-Watashitachi-no-Kyoudai-i/ (2025/11/26)